

清沢満之と西洋哲学



清沢満之は、没後百周年（2003年）を契機とした一連の研究をきっかけとして、「哲学者」としての側面に注目が集まるようになった。当時刊行された岩波版の全集では全九巻のうち五巻に「哲学」という文言が掲げられており、清沢を哲学者として論じることはもはや自明のことであるかもしれない。しかし、それから十数年を経た現在、哲学者・清沢満之をめぐる研究状況も多くの点から変わりつつある。近年、東大哲学科時代の学びを通じた西洋哲学の受容等の解明が進み、より正確に清沢満之と西洋哲学との関わりを論じることができるようになってきている。また、近年の多分野にまたがる「近代仏教」研究の盛り上がりは、清沢哲学の思想史的背景を理解するための新たな視点を提供するであろう。

そこで「ポスト百周年」における清沢哲学研究の新たな可能性を探ることを目指して、2017年3月13日、求道会館を会場に、第3回「清沢満之研究交流会」を開催した。

以下、それぞれの発表の要旨とそれに対するコメント、および質疑応答の一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員 長谷川琢哉）

研究発表

I 清沢哲学研究の課題と展望

長谷川 琢哉（親鸞仏教センター研究員）

今村仁司の研究とそれを高く評価する末木文美士によって、「哲学者」としての清沢満之の可能性を探る試みがなされてきた。清沢哲学のアクチュアリティを問う限りにおいて、彼らの問題提起は依然として重要なものである。しかしその一方で、清沢から



求道会館

「独立して」なされるような読解には問題もある。今村・末木の問いをあくまでも清沢哲学研究としてとらえ直すためには、彼らによっては素通りされてしまった、より実証的な哲学史・思想史的研究が不可欠である。清沢は西洋哲学の学びを通して独自の仏教思想・仏教信仰を構築したのであり、それはさまざまな伝統の「ハイブリッド」として理解することができる。東大時代のノートや蔵書などの調査によって従来の固定化した哲学・思想史的図式を問い直しつつ、清沢が西洋哲学との格闘を通じて練り上げた独自の思索と信仰を見定めなければならない。

日本における西洋哲学の初期受容

II

—— 東大時代の清沢満之を中心にして ——

村山 保史（大谷大学教授）

2010年度から実施した科学研究費研究の成果から、清沢と同時期に東京大学で学んだ高嶺三吉の遺稿中に発見された自筆講義ノートとの照合作業によって、こ



れまで全集には収録されず詳細も不明であった清沢による自筆講義ノートの一部が特定できるようになった。そこには日本人教師から学んだ形跡とともに三人の外国人哲学教師（フェノロサ、ノックス、ブッセ）による講義のノートが残っており、講義内容として、フェノロサによる近世哲学史講義のみならず、少なくとも形式論理学、倫理学、美学、古代哲学、ロツツェ哲学といった、これまで推定されていた以上に幅広い分野のものが含まれている。西洋哲学からの影響を踏まえようとす

る今後の清沢研究においては、東京大学時代の「初期清沢」がいかに関西哲学を受容したかの説明が必須の条件となるであろう。

近代仏教のなかの清沢満之と哲学

III 碧海 寿広

(龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員)

明治以降の仏教に、哲学という新しい知がどのような影響を及ぼしたのか。その内実を検討する際、清沢満之は決して欠かせない人物である。清沢は、西洋哲学という翻訳語を用いて仏教をめぐる日本語を更新するという営みを、ほぼ生涯にわたり続け、それは晩年の「精神主義」の時代にまで及んだ。こうした哲学の言葉による仏教刷新の取り組みは、同時代のライバル的な存在である新仏教運動の賛同者たちにも共通して見られ、明治の仏教思想は、哲学という共通基盤の形成と展開と崩壊という観点から、再考することが可能である。清沢の哲学的な仏教論については、真宗教義からの逸脱であるとの批判も、これまでなされてきた。仏教への哲学の導入を契機とした、伝統と革新の衝突ということであり、こうしたテーマも今後の研究課題として重要である。



全体討議

コメンテーター 井上 克人 (関西大学教授)

今回は、清沢満之の哲学者としての側面に焦点を置き、彼の西洋哲学の受容がテーマであった。清沢にとって哲学は、自ら実体験した語り得ざるリアリティを自己確認しながら語る営みにほかならなかった。漢籍に基づく明治人の教養には「理事無礙」を説く華嚴哲学や「理一分殊」を説く朱子学の形而上学の学問的伝統が息づいていて、清沢もその例外ではない。彼はそれを受け皿として西洋哲



学を受容したのであり、明治期の外国人講師もその受け皿に合わせて西洋哲学を紹介した可能性も考えられよう。そして西洋近代化の潮流に沿って、仏教も既存の哲学的論説がにわかにクローズアップされてきたのである。清沢の立脚地に転回があったとすれば、それは、上記のごとき哲学的思索を踏まえつつも、日本的感性の基層にある〈包容と贈与〉のパラダイムへ立ち還ったことであろう。

開催を終えて

司会進行 名和 達宣 (真宗大谷派教学研究所研究員)

前2回が「異領域間の対話」を志向した総論的なテーマであったのに対し、今回は「清沢満之と西洋哲学」という個別のトピックがテーマに選ばれた。三人の発表者からは、それぞれの専門的な知見に基づく研究成果や視座が報告されたが、コメンテーターの井上氏から投げかけられたのは、「そもそも『哲学、とは何か』という根本的な問いであった。この問いに揺り動かされたためであろうか、その後の討議では、固有の専門領域にとどまらない、緊張感のある議論が繰り広げられた。ただし、今回の会では、東大時代をはじめとする、いわゆる「前期・清沢」における西洋哲学の受容が中心であったが、この課題は中期（「他力門哲学骸骨試稿」、『臘扇記』等）や後期（「精神主義」）において追究し直さなければならないであろう。



※研究発表・全体討議の詳細は、『現代と親鸞』第37号（2018年6月1日発行予定）に掲載予定です。



全体討議の様子